

クリスチャン・プリジャン Prigent, Christian (1945～)

ブルターニュのサンブリュー市出身。母は小学校教諭で父はリセの古典文学教授。父は地方の有力な共産党員でもあったため、幼少の頃は一家を挙げて活動に身を捧げる環境で育った。15才で入党、68年5月には新左翼^{ニューレフト}としてレンヌ市デモの先頭に立った。その翌年、ジャン＝リュック・ステンメッツと共に「TXT」を創刊。一時期は、ソレルスと共に「毛沢東主義^{マオイズム}」を標榜したこともあったが、74年に政治活動を停止。テル・ケル派からも距離を取る。その後はロラン・バルト指導の下で博士論文『フランシス・ポンジュの詩学』を準備していたこともあったが、刊行はされていない。著作は40冊以上ある

詩は、13、14の頃から書き始めたそうだが、本人曰く16才のとき出会ったランボーが決定的であったとされる。父の影響の下で共産党推薦図書と古典文学（タキトゥス、ウェルギリウス等）も愛読していたが、リセ時代はソヴィエト前衛詩人・シュルレアリストともっばら

「20世紀詩」に傾倒していた。しかし、徐々にシュルレアリスムが重視する特異なイメージやコラージュへのこだわりや、抒情・ロマン主義的傾向に疑問を抱くようになる。イメージが提示されることによって、真の「現実」の「穴」が塞がれてしまう（ラカン）からだ。こうした反動から、彼はポンジュへと接近する。同時に反響言語性

（écholalie）、音拍（mesure）、律動（rythme）という「音／律動」への信頼を寄せるようになる。その一方で、ポスト・マルルメ的

詩人（シャール、デュブーシェ、ボヌフォワ等）には断乎として拒否をつきつける。

プリジャンは2011年4月に来日した。ナタリー・カンターヌの代わりとして来た。震災直後ということもあったため、司会である野村喜和夫はプリジャンに「どんな気持ちで日本に来られたのか¹」と質問した。それに対してプリジャンは「一市民として、原発や震災に対しては意見や不安もあるし、現状に対する怒りもありますが、それは書き手としての自分の立場とは切り離して考えなければならないと思います。²」と答えている。「政治的なもの、またはカタストロフに対して、どんなときでも私は同じような態度をとる³」クリスチャン・プリジャン。彼の主体論は、「作者の死」と無関係ではない。「伝記的なアイデンティティを持つ「私」と、それとは違う何者かの声が同時に響いている。アイデンティティのこのような分散と表象性の絶えざる地滑りが、現実なるものが体験される悲喜劇的ドラマに一番近いのだとプリジャンは言う⁴」。それでもプリジャンは疑う。「疑っていないことがすなわち抒情なのではないか⁵」。



La Vie moderne — un journal

*Incipe, Caliope, licet et considere : nom est
Cantandum; res vera agitur*

Juvénal
(*Satires*, IV)

*Calliope, assis! vazy! hop! pas de bel
Canto sur la lyre : ici c'est du réel*
(On y crapahute en look pithécanthrope
Oblique ahuri à bloc en vieille Europe).

Non mocheté violence à peine (ah fastoche
S'indigner en vers!) mais la neige énigma
Tique et toc c'est sur écran plat le magma
D'actumonde en bougé split-screen. D'où xa cloche

Érectus moyen le bric de breaking new
S'et le broc de save the date in the flou
Tendu – gare à pas se clouter sur croix de
Maniaco-dépression bipolaire 2!

現代生活——ある日記

カリオペ⁶よ、始めてたもれ。あなたは座ったままでよいのです、叙事詩が朗読されるわけではなく、史実が主題ですから⁷。

ユウエナリス⁸（風刺 IV）

カリオペ、お座り！そら！行け！リラ⁹で奏でる
美しい歌じゃない。ここがまさに現実
（老いたヨーロッパで完全に腑抜けてかたむ
いたピテカントロプスをルックしながら現実を行軍する）。

醜さもなく、暴力もほとんどない（ああ、楽々
韻文で憤慨だ！）しかし 暗示 的な 雪
は痙攣し、コツコツ、それは平らな画面上に
スプリット・スクリーン¹⁰でピンボケしてる時事の溶岩。ゆえにベル

速報^{そくほ}の てんでん 平均的エレクトス¹¹

ソれは ばらばら インザぼやきの日付をセーブ
緊迫した——十字架に打ち付けられないように
注意しろ、双極性躁鬱病の2！

Société

1

(*cher journal*)

5/7 (*p-m*). Niqabs & strings sur l'estran.

Pensée : « vie » = un massage géant.

Lu au kiosque : *Le poil dans le X? Plus qu'un
Marché de niche* (ici : non). Sous spot des seins

Rutilaient (penser noter label pub des
Huiles). Cher Journal est-ce en moi l'instinct de
Ciel qui aime mieux la mouette ou sterne que
Méduse? Et le carmin qu'encalicotait

Mes carnations serait-ce (en stretch lycra l'a
Mas femelliflue¹² cuit Phébus) pas l'A
DN cro-magnon 'core accroc à mon rogn'
On qui me ramone la caverne et grogne?

社会

1

(親愛なる日記へ)

7月5日 (午 - 後)。沿岸帯でのニカブ&紐パン。

思索：「生」=巨大なマッサージ¹³。

キオスクで読んだ：Xの毛? (ここにはない) ある
ニッチ市場以上の。乳房のスポットの下で

輝いていた (オイルの広告ラベルを書き留める
つもりだ)。俺にとって親愛なる日記とはメデューサより
カモメかアジサシを好んでいる空の本性
なのか? そして横断幕していた深紅

俺の肌の色 (伸縮加工したライクラ¹⁴は
フォイボスを煮た甘ったるい固まり) は あい
からず隠れ家を掃除して文句をたれる俺の腎
臓に鈎引かれたクロ - マニョン DNA ではないのか ?

portrait de fin
(en *Quo vadis?*)

Et le soleil t'apporte le beau corps d'aujourd'hui
Dans les coupures de journaux
Ces langes

Blaise Cendrars (1914)

(*Iter crucifici nolo*)

En western à pied & jardinage souple
D'inactuel lopin hop cool va découple
Relax tes moyeux de haine assez de mordre
En toi le chien : pause! Ose non-gueule ordre

Au poil en arts cocoon ménagers maintien
Ad hoc de la viande aimée du genre humain
En soi & pour soi. Stop yoyo Loyola!
Fini le VTT sur ton Golgotha!

Si (aux amis) vous croisez moi ou mon ombre
Sur périph' en filocherie vers de sombres
Cieux de rumination pitié m'envoyez
Plus me faire clouter aux actualités

最後の肖像
(アナタハドコへ行ク?)

そして太陽は今日の美しいからだを君に持ってくる
日記が抹消される中で
この桎梏

(私ハ十字架ニ旅スルコトヲ望マナイ)

徒歩でウェスタン&しなやかな庭いじり
ホップでクールな時代遅れの狭い土地は解き放ち
リラックス おまえらしく十分に犬をかみつき
おまえの憎悪の車輪ハブ。待て! 思い切って吠えない命令

自家製 ^{コケーン} 繭の芸術上の毛へ保つ
人類の愛された肉(体)のアド・ホック
即自&対自。ストップ YOYO ロヨラ¹⁵!
VTT¹⁶を終わらせろ そこはおまえのゴルゴタ!

もし(友だちへ)、君らが私と私の影
反芻同情の陰気な天から網目織状の韻文内の^{まあり}周りにある私の影
を信じてくれるなら、もっと私に鋏を打ってやってください
現代性という鋏を私に打ってやってください。

註釈

¹ クリスチャン・プリジャン、アンヌ・ポルチュガル、野村喜和夫、関口涼子、荒井高子、水無田気流「抒情から遠く離れて——フランス詩の現在と対話する」、『現代詩手帖』、2011年7月、13頁。

² 同上。

³ 同上。

⁴ 立花英裕「テキストの声——クリスチャン・プリジャン論」、『現代詩手帖』、2011年7月、50頁。

⁵ 同上。

⁶ 「カリオペーよ」と叙事詩の女神を呼び起こしつつ、自分のは高尚な叙事詩ではなく、卑俗な諷刺詩なので、起立した姿勢ではなく座ったままくつろいで話し給え、といささか自嘲ぎみにふざけている。（ペルシウス／ユウェナリス『ローマ諷刺詩集』、国原吉之助訳、岩波書店、2012年、346頁。）

⁷ 同上、125頁。

⁸ デキムス・ユニウス・ユウェナリス（Decimus Junius Juvenalis, 60年 - 130年）古代ローマ時代の風刺詩人、弁護士。

⁹ 古代ギリシアなどで用いられた豎琴。共鳴胴にたてた日本の支柱に横木を渡し、弦をはったもの。

¹⁰ スプリットスクリーンとは画面において二つないしは複数に分割されて映される映像の表現技法。

¹¹ Pithecanthropus Erectus。原人の一種。チャールズ・ミンガスに同タイトルがある。

¹² 1960年10月3日に発売された『Preces Gertrudiana』という大聖女ジェルトルーデイスと聖女メクティルデイスに啓示された祈りが掲載されている本にこの単語が出てくる。spōse melliflueを句跨がり、さらにfをtと誤読することで造られた語だと考えられる（下図参照）。

¹³ その他の意味：ゲル化、凝固、（宝くじなどでの）グループ買い。

¹⁴ タイツのような、伸縮性のある布（商標）。

¹⁵ イグナティウス・ロヨラのことと思われる。

¹⁶ Véhicule transport de troupe 装甲人員輸送車

